

事例:S氏 78歳代男性

【既往歴】脳梗塞(2年前)後遺症なし
 【現病歴】COPD・MCI ※下肢筋力低下著明

<家族> 妻(3年前に肺がんで死去)一人娘(市外居住/車で40分/週1回程度の訪問)
 <S氏> 元精密機器メーカーの凄腕エンジニア・独居・几帳面な性格で、身の回りの整理整頓も完璧。
 「他人に迷惑をかけること」「理屈に合わないこと」「機械(管)に繋がれて生きること」を極端に嫌う。



【事前指示書作成】
 独自の事前指定書を作成

S氏:肺がんの妻を亡くす。意思疎通の出来ないまま数か月過ごさせたことへの強い後悔から、「これは私の知っている妻ではない。生かされているだけの肉体だ。こんな機械の奴隷にはならない」

主治医やCMへ

S氏:万が一の時は書類の通りにしてほしい。娘にもいい聞かせてある。

チーム:S氏はしっかりしている。妻の時の経験を踏まえてACPが完璧にできている事例と安心している。

【呼吸困難】S氏は長女に電話。長女は苦しむ父を見て119番通報☎

事前指示書があることにより判断に迷う

長女:父は延命をしないと希望していることを知っているが、苦しむ父を見てパニック。

S氏:死にたくない! 助けてくれ!

救急隊:主治医の連絡先に一報し、救急搬送する。

【救急外来】S氏は、意識朦朧、チアノーゼ、呼吸困難にて苦痛。

事前指示書と共に救急搬送

当直医:事前指示書を一読。

長女:S氏の「助けてくれ!」という絶叫が耳に残っている。医師の前で泣き崩れる。

【究極の選択】
 主治医はS氏の苦痛と、長女のパニックを目の当たりにし、究極の選択を迫られる。

主治医→長女
 S氏は延命拒否を希望している。今の状態は、一時的な増悪。人工呼吸器でのサポートにより、また話が出るまで回復する可能性もある。

長女→主治医
 父はあんなにも管を嫌がっていた。でもあんなに怖がっている父を見捨てるなんて。私が父を殺すことになるのか。どうしていいかわからない。助けて!!

主治医:今は命を守ることを優先しましょう。その後の事はまたみんなで話し合しましょう。

挿管・人工呼吸器の処置を提案

【退院】S氏は、一命をとりとめ退院。経管栄養を挿入している。

経管栄養

S氏:口から食べたい。でも飲み込むのが怖い。

COPDの影響で息苦しさ残り、再度の急変への不安が強い。

【S氏】あんなに死ぬのが怖いと思わなかった。自分が情けない。ふと夜中に目が覚めると、あの時の苦しさが襲ってくる。生きたいのか、死にたいのか、自分でももうわからん。あの時死んでおけばよかったかな。娘には悪いことをした。次はもういいと言いたいが、いざとなったらまた助けてと言ってしまうかもしれない。

【長女】父を裏切ったのは私。あんなに父が嫌がっていた管をつけて戻ってくるなんて。あの時の父を見たら…私はどうすればよかったのでしょうか。次はもう救急車を呼ぶ勇気ができるかどうか分からない。

【チーム】あんなに明確だった意思が崩れてしまった。次に苦しくなった時、私たちは何を信じればいいのか。

現場に迷いが生じている